令和２年７月豪雨

アムダ、被災地で支援活動

コロナ対策徹底で施術

柔整64名、鍼灸21名が利用

避難所となった人吉市立第一中学校

九州を中心に日本各地で被害をもたらした「令和２年７月豪雨」。国際医療ボランティア組織の特定非営利活動法人ＡＭＤＡ（アムダ、岡山市）は、被害が甚大だった熊本県の球磨地方に医療チームを派遣、７月６日から22日まで支援活動を行った。

避難所となった人吉市立第一中学校で７月11日からアムダの調整員で柔整師の平野晃氏が避難生活者らのケアを開始。新型コロナ感染防止対策として複数の専門家の指導を受けて「入室前、施術前後計３回のアルコールによる手指消毒の徹底」「マスク着用」「ベッドのアルコール消毒」「タオル、シーツの交換」を遵守、接触を最低限にするため施術時間を15分と定めて行った。12日には、熊本地震以降「アムダ熊本鍼灸チーム」として災害鍼灸に携わってきた吉井治氏（鍼灸師・柔整師）が合流し、15日から鍼灸によるケアに当たった。柔整師・鍼灸師による支援活動が終了した19日までに柔整を利用した避難生活者は延べ64名（うち１名はテーピング指導のみ）で、鍼灸は延べ21名。今後も柔整や鍼灸の施術を希望するという利用者に向け、人吉市鍼灸マッサージ師会及び球磨郡鍼灸師会の協力を得て、近隣で受診可能な鍼灸院、整骨院のリストを作成。最終日に避難所に掲示するとともに避難所運営者、施術を受けた利用者に渡した。また、柔整師が必要に応じてセルフケアやストレッチ、弾性包帯の巻き方などを指導した。

「熊本地震の経験生きた」ケアに当たった吉井氏語る

生まれたばかりの子供を抱えながら避難してきた女性は施術後、目に涙を浮かべていた。杖無しでは歩けない老婦人は家を流されたといい、将来への不安を訴えていた――。

ケアに当たった吉井氏は「被災地では非日常の環境に一気に入り込み、身心の動揺が少なからずあります。それでいて、医療支援の現場では、環境の変化の振れ幅にも柔軟に対応する必要があります。熊本地震の被災地での活動経験から環境の変化への耐性を身に付けたことが、今回の活動へ生かされました」と語った。「熊本地震での活動時は自分自身の体調管理にあまり気を配らず、支援参加後、体調がしばらく元に戻らない時期がありました。今回は参加後のセルフケアをすることでいち早く通常の生活に戻すことができました」とも話している。

▶ケアに当たる鍼灸師で柔整師の吉井治氏（上）、柔整師の平野晃氏（下。写真は全てアムダ提供）